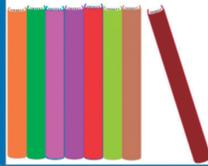




大人が絵本を 第28回 聞こえる、聞こえる。



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*

小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事ファウンダー

絵本から音楽？

大人が絵本を読むと不思議な感覚に陥ることがあります。子どもの頃の感情が、まるで昨日のこのように鮮明に湧きあがってきたり、いわゆるデジャヴを感じたり、それから、実際の絵本からは出ていないはずの音や音楽が聞こえてくることもあります。絵本に潜む力は無限大とは、言い得て妙です。

絵本から音が聞こえてくるとは「音の出る絵本」のことではなく、言葉と絵とから成る絵本から音が聞こえてくるのです。絵本から音は、子どもにだって聞こえるのですが、音楽的なものになると断然、大人の方がより現実味あふれるメロディが鳴り響くのです。子どもの場合は、オノマトペが音となりますし、絵本の絵を見ながら大人に読んでもらうことで、絵と声が共鳴して音となります。読みあう大人の声を手助けとなって、音として子どもたちに届けられるのです。では、大人の場合はどうでしょうか。絵本の中の音、音楽について考え、感じ、聞いてみましょう。

絵本から音楽が聞こえるなんて、物理的にありえないことですが、絵本の特性から考えると納得できるでしょう。絵本の定義を再度、確認してみると、「絵と言葉が互いに補完し合って、ページをめくることによってドラマが生みだされる」¹⁾ものです。絵を見て、言葉を聞いて、イメージで想像して物語世界を広げ、楽しむものです。それは物語の風景を想像することで、登場人物たちが駆け回り、絵本に描かれている以上のことを心と脳が感じて創り出す世界で、たとえ言葉はなくても絵だけでも躍動的な物語を脳裏に描くことができるのです。絵本から聞こえる音も同様で、実際には音楽など流れてい

なくても、物語世界をイメージすることで、想像している読み手だけに音楽が聞こえてくるのです。人生経験を積んだ分だけ、物語世界を自在に渡り歩いてきた年数の分だけ、大人に聞こえてくるBGMも鮮明なのです。想像する力と、創造する力が生み出すファンタスティックで優美な能力と言えます。

絵本に耳をすまして

色鉛筆の優しいタッチが特徴の絵本作家・どいかや氏が描く双子の女の子「チリとチリリ」は、シリーズすべてのお話で「チリチリリ チリチリリ」と自転車で出かけると、四季折々の生き物や食べ物との物語が生まれます。この展開だけで想像つくと思いますが、『チリとチリリ』の物語世界に入ると、常に自転車のベルの音がチリチリリ、チリリンチリリンと鳴り響いてくるのです。絵本が実際に鳴っているわけではありませんが、表紙をめくる頃からクリアなベルの音が聞こえてくるのです。「絵本から音が聞こえる」とはそういうことです。



どいかや 作
『チリとチリリ』
(アリス館)



絵本に言葉がなくても、音は聞こえてきます。ピーター・スピア氏の『雨、あめ』は、「文字のない絵本」の代名詞です。降りしきる雨の中、レインコートを着て、長靴を履いて傘をさす姉弟と犬の表紙絵を見ただけで、「ザーザー ザーザー」と降る雨音が聞こえてくるようです。また、見開きいっぱい

手にするときは！

絵本から音♪ 音楽♪

企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)



ピーター・スピア 作
『雨、あめ』
(評論社)



に地面が描かれているページに、真っ直ぐに降り注ぐ雨と波紋、そこに子どもたちの足が見える描写では、ピチャピチャ、ピチャピチャと子どもの歩く水音と雨音が鳴り響きます。言葉がないからこそ、絵をじっくりと見て、絵を読むことで聞こえてくる音があるのだと思います。『雨、あめ』はそんな一冊です。雨の音や子どもたちの笑い声など、それぞれに耳を傾けると、雨脚の強い音も弱い音も、側溝に流れ入る水音も、それぞれに異なった音になるのです。



宮澤賢治作品と音楽

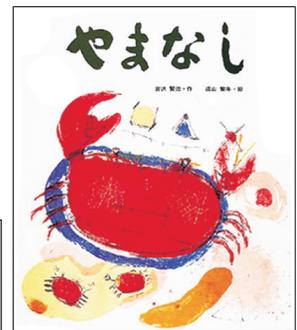
「音楽が聞こえてくる」とよく言われるのは、宮澤賢治作品です。農民生活の向上に取り組みながら、童話作家として国内だけでなく、海外でも著名な宮澤賢治作品は、大人の皆さまであれば教科書などで少なくとも1作品は触れたことがあると思います。何しろ、「オノマトペ」という概念が浸透していない時代に、文学作品にオノマトペを取り入れ、絶妙に表現した作家なのですから、賢治作品イコール音楽というのは至極、納得できます。

「どっどど どどうど どどうど どどう」でお馴染みの『風の又三郎』の冒頭では、強い風が吹き付けている光景が即座に目に浮かぶと同時に、地響きのような力強い音が聞こえてきます。風の情景が音

と共に飛び込んでくる感覚を感じられると思います。とても単純明快な例です。

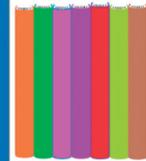
『風の又三郎』とは対照的な音が聞こえてくる作品に『やまなし』が挙げられ、こちらは軽快なリズムが聞こえてきます。クラムボンの笑い声である「かぷかぷ」という表現が、私のイメージに不思議な作用を起こし、水の音のようなどとも高い音が聞こえてくるのです。宮澤賢治だからこそ表現できた「かぷかぷ」という擬態語が、想像する力に彩りを加えてくれているのかもしれませんが、『やまなし』は不思議な世界観を持つ物語で、「死」をも扱っているのですが、しかしこの擬態語によって楽しい気分にするのです。実に不思議な作用です。そして、ショパンの「小犬のワルツ」のような音楽が流れ出すのです。文字と絵で成る絵本から音楽が聞こえてくるのですが、『やまなし』に持つイメージが想像力に働きかけると、音楽となって聞こえ出すということです。大人には、そんな体験が少なからずあると思います。

宮澤賢治 作
遠山繁年 絵
『やまなし』
(偕成社)



宮澤賢治 作
小林敏也 絵
『風の又三郎』
(パロル舎)





『1000の風 1000のチェロ』

音楽をテーマにした絵本を読むと、メロディが流れているような体験は誰にでもあるのではないのでしょうか。『ベンのトランペット』(R.イザドラ作)、『ネコとクラリネットふき』(岡田淳作)、『きょうはマラカスのひ』(樋勝朋巳文)、『ふたりは まちのおんがくか(くまのアーネストおじさん)』(ガブリエル・バンサン作)等等、まだまだ、たくさん作品があります。そのような音楽の絵本の中でも、イチオシの作品を紹介しましょう。

自らもチェロを弾き、絵を描く作家のいせひでこの『1000の風 1000のチェロ』は、1995年の阪神淡路大震災がテーマです。震災2か月後の神戸に入ったいせ氏は、「はじめてスケッチ帖を白紙のまま帰った旅」をしました。それから3年後、神戸で行われた復興支援コンサート「1000人のコンサート」にチェリストとして参加され、ようやく白紙のスケッチ帖が「チェロ弾く人のクロッキーで埋められて」誕生した物語です²⁾。最後のページ以外は、どのページにもチェロの絵が描かれています。その絵は音楽となって絵本から流れてくるのです。いつまでも眺めていたい光あふれるような色彩と柔らかくて流れるようなタッチの水彩画の表紙絵から、まるで生きているかのようにチェロの弦をはじく弓と、音楽と一体化した少年、音色にのってそよそよと揺れる草木たち、その音色がやがて風に乗って雲の中に溶け込んでいく描写によって、絵が揺れ動き、音楽が聞こえてくるのです。絵に言葉がのっかると、



いせひでこ 作
『1000の風
1000のチェロ』
(偕成社)

いつの間にか思考はメロディであふれ、リズムをとりたくなるのですが、それにはもうひとつ魔法の理由があるからです。文字の部分に音符が記されていて、「ことりのこえ」「かぜのおと」「かわのおと」などを音符で表現しているのですから、音楽脳にならないわけがありません。小鳥の声、風の音、川の音が音楽となって聞こえてくるのです¹⁾

しかしながら、絵本を読んで、どのような音楽が聞こえてくるかは、その人の音楽体験に左右されると思います。「音」の場合は、自然や物的な音など多様でしょうが、「音楽」になるとそうはいきません。それぞれの実体験が影響を及ぼすことになるでしょう。音楽体験の少ない私ですが、そんな時、少ないながらも知り得るメロディが流れてくるから、これまた不思議です。「1000のチェロ」では、ベートーベンのチェロ・ソナタ第3番が流れます。本書のカバー折り返しで、いせ氏は「こころはひとつにできる」「きもちはかさねあえる」³⁾と記しています。この絵本から、苦悩を乗り越えた人たちが、音楽を通して心を重ね合わせていく姿が伝わってきます。それは、言葉や絵にも同じことが言えて、人は言葉や絵、音楽を通して何かを伝え、それを聞いた者は安心感を覚えるのだと思います。

魂のひびき



絵本の中の「音」が大切な要素であることに着目した臨床心理学者の河合隼雄氏は、絵本の絵と言葉とテーマのそれぞれが音楽性を持っていると述べ、絵本の中の「音と歌というのは、心をすましていたら聞こえてくる魂のひびき」との言葉を遺しています⁴⁾。宮澤賢治作品は、様々な画家によって絵本化されているのですが、絵との調和が心(魂)に響いてきたか、音楽が生まれたかに関わることで、感動の度合いが違っていった体験に納得がいきます。いせ作品に、常にズンズンと心を震わされているのは、

きつといせ氏の絵本の要素が私の魂に響いているからなのだと、こちらも納得です。

また、ノンフィクション作家の柳田邦男氏は、「年齢や民族や宗教の違いを超えて『心に響くもの』となると、いちばん普遍性があるのは、やはり音楽ではなかろうか」と提起したうえで、本連載第5回で紹介したガブリエル・バンサン氏の絵本に、音楽のそういった力を表現した作品が多いと述べています。特に、先にあげた『ふたりは まちの おんがくか(くまのアーネストおじさん)』の表紙絵を「音楽がもたらす“心の温もり”と“生きる力”とを、実にやわらかく表現している」と評しています⁵⁾。

音楽は通常、耳から入ってくるものなのですが、絵と言葉とテーマから受ける音の刺激が、読む者のイメージと心に響き共鳴することで絵本から創り出される音楽があるのだと、ストーンと腑に落ちます。

ぐりとぐら♪

大人目線の「絵本と音楽」についてお話してきましたが、最後はやはり大切な子どもたちへ視線を移しましょう。子どもたちの大好きな音楽の鳴り響く絵本と言えば、この連載でもよく取り上げる『ぐりとぐら』でしょう。「ほくらのなまえはぐりとぐら、このよでいちばんすきなのは、おりょうりすることたべること。ぐりぐら ぐりぐら」と歌いながら歩いていくシーンでは、自然と歌が口をついて出ます。『チリとチリリ』と同様に、「ぐりとぐら」の名前がリズムカルなのですから、リズムをとってしまうのも当然です。

子どもにも大人にも大人気の「ぐりとぐら」の歌を、皆様方は歌えますでしょうか。実は「ぐりとぐら」の楽譜は、一般公募されたこともあって100パターン以上あるのです⁶⁾。ですから、音階は皆様方のオリジナルでも大丈夫なのです。ぜひぜひ、チェアサイドで歌ってみませんか。子どもたちは、怖さも緊張感も忘れて楽しく聞いてくれるに違いありま

せん。「もう一回!」とリクエストがあったら効果てきめんということです。あちこちの小児歯科医院から「ぐりとぐら」のいろんな歌声が聞こえてきたら楽しいですね。

♪ほくらの なまえは ぐりとぐら
このよで いちばん すきなのは
おりょうりすること たべること
ぐりぐら ぐりぐら♪



なかがわりえこ 作
やまわき ゆりこ 絵
『ぐりとぐら』
(福音館書店)

文献

- 1) 吉田新一: 絵本/物語のイラストレーション, 日本エディタースクール出版部, 東京, 2001, pp.9-16.
- 2) いせひでこ: 1000の風 1000のチェロ, 偕成社, 東京, 2000, あとがき.
- 3) 同上: カバー折り返し.
- 4) 河合隼雄: 絵本の中の音と歌 (In 河合隼雄, 松居直, 柳田邦男: 絵本の力), 岩崎書店, 東京, 2001, pp.13-43.
- 5) 柳田邦男: 大人が絵本に涙する時, 平凡社, 東京, 2006, pp.49-53.
- 6) 福音館書店母の友編集部: ほくらのなまえはぐりとぐら-絵本「ぐりとぐら」のすべて., 福音館書店, 東京, 2001.

絵本

- 1) R.イザドラ作・絵, 谷川俊太郎 訳: ベンのトランペット, あかね書房, 東京, 1981.
- 2) 岡田淳: ネコとクラリネットふき, クレヨンハウス, 東京, 1996.
- 3) 樋勝朋巳: きょうはマラカスのひ, 福音館書店, 東京, 2013.
- 4) ガブリエル・バンサン作, もり ひさし訳: ふたりはまちの おんがくか(くまのアーネストおじさん), B L 出版, 東京, 1983.